

# これからの猪猟

〈22回〉

田宮 治

## 狙いどおりの実戦

ブイ号、カツ号、武蔵号の強烈な噛み止め犬たちでなければ絶対

にできない大峰下の急斜面を一直線の谷落としから、追撃によつて

必死で寄り付いている最中、大杉林の向かいの平をガサガサ、ゴソ

すると、やっぱり前回の大猪同様、親仔連れの二、三頭が大杉林

にできない大峰下の急斜面を一直線の谷落としから、追撃によつて遂に小川の滝壺にはめ込んだ手練

の大猪を三〇秒の付け撃ちで仕留めた。あの一戦からちようど一週間後の十二月十三日のことである。

私は逃げざる猪を必死で追う犬たちを追つて、山裾の小川沿いに広がる広大な田んぼ荒らしの泥地で、泥濘にはまりながら悪戦苦闘

「よつしや、これはいただきだ！」と即座に車に戻り、今日の狙いをこの親仔連れに的を絞つたのである。

私は「柳の下の泥鰌」ならぬ「崖下の二頭目の大猪」を狙つて、先週と全く同じキャンプ場近くに車を止めた。

この音は止め猪とは別の親仔連れだと一瞬で判断したが、この状況下ではどうすることもできなかった。当然、この時の私は、ここ

その結果、ガサゴソ音の正体は一〇〇キくらいの母猪と五、六〇キの仔猪であることが分かった。

どんな激戦であろうと、充実した実戦を無傷で完勝して楽しむた

私が自信を持って、あの一戦からわずか六日しか経っていないこの猟場に的を絞つたのは、それなりの理由があった。

犬たちが頑張つて止め切つてい

それでも念には念を入れて、猟場の大峰筋の右側の山裾をぐるっ

た上で、猪猟技術をしつかり点検して、この戦いにはこの猪犬たちを、というように当てていく以外

それは六日前の戦いで、第二の猪止め現場となった大杉の根元に

独猪犬猟の醍醐味であり責務でも

下りする猪の渡りを注意して見回

そんな思いと覚悟をもつて戦え



篠竹の大藪。猪はこの中に寝ているので、犬たちは決まってこの中で止め切り戦い続ける。だから、どうしてもこの大藪で勝負しなければならない

ば、百回戦っても必ず勝てるのだ。

それに基づいて今日の相手を見た時、これは大変なことになってしまふと思った。

一〇〇以上の母猪とは、昨猟期から二、三度戦っているの、その攻撃力や逃走術、さらに母猪の恐ろしいまでの戦いの手口の実は、凄いものがある。

まず犬たちに絡み止められると、わが仔猪を守るために捨て身

に変身し、凄い力で噛みまくり、犬たちを反対に押し戻し、その隙を見て仔猪を安全な方向に逃がす。そして、犬たちに思い切り体当たりして、サッサと姿をくらますのである。

このように実戦で見せつける数多の猪が、命懸けで反撃して来

る本当の実力を認識していなければ、狙いどおりの実戦などとてもできるものではない。

ましていつでもどこでも思いどおりに戦って、ただ一人で大猪に完勝するには、実戦また実戦の繰り返しの中から学び取っていくものである。この技術こそが、完勝の極意なのである。

単独猟の本筋や実戦の流れは、誰がやろうとそう大差はなく、止めた猪に全力で寄り付いて撃ち獲るといふ原則に概ね変わりはない。

しかし、猪猟の頂点に立つためには、実戦の中身、つまり実戦中の猟場全体を初めから終わりまでしっかりと注意深く検証することである。

この猟場には猪が何頭いて、どの猪道を使って、どんな行動をとっているのか。さらに、その猟場の猪がどのくらいの大きさで、強さや逃げ道はどの方向かなどを、猪道や食み跡に残る形跡と足跡から、正確に判断していく。

そして、この猪に犬たちが勝負を挑む場合、猟場のどの辺りから

犬たちを入れて、どの辺りで猪止めさせて寄り付き、撃ち獲るのが一番安全なのか。

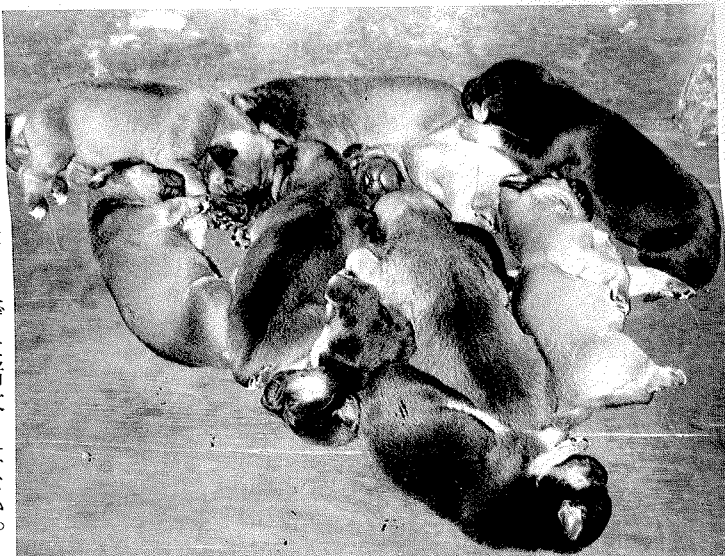
そんな相手（敵）の動きと戦う猟場の全体像を大小漏らさずきつちりと把握して、わが犬群の実力を加味した上で、絶対に勝つ作戦を打ち立てることが、最高の結果を残し続けることになる。

勝戦を積み重ね続けることが、何にも勝る猪猟成長の大道である。だが、ここから先、つまり頂点辺りの実戦となると、前述の事項などは当たり前で、それより大事な猪猟完成の基軸となるのが、人生を懸けて猪猟を全うする強い精神力なのである。

頂点に登り詰めるために必要な戦術や猪犬仕上げを、繰り返して発信し続けてきたが、なかなか全国猪猟人の心にうまく伝わっていない。まだまだ私の発信手段が未熟なのかもしれない。

このことが確実に伝わって、猪猟や猪犬を十分に理解してもらった上で活用していただかなかつたら何の意義もない。

実際、この大好きで残したい猪



確かな仔犬は何代も苦勞の末に生まれるので、このような10頭の仔犬でもバラツキなくみんな秀犬になる

獵と人生を懸けて作り上げた猪犬たちを未來まで繋げて、数多の猪獵人に活用してもらおうための発信手段をなお一層考えて努力するところが、私に残された使命だと思っ

ている。  
猪獵はまぎれもない命懸けの戦いなので、まずこのことを自分自身に叩き込んで挑み続けることには、仔猪一頭すら獲れるもので

はない。

まして単独獵ともなれば、自分で仕上げた猪犬たちがどんな猪でもがっちり止め切らないことは、いくら達人であっても、猪など撃ち獲れるものではない。

さらに、猪を撃ち獲る実戦の場を踏んで実績を積み上げなければ、猪の怖さや戦う手口も全く知らないわけだから、そんな状態で

の猪獵は恐ろしいことになるのである。

多くの猪獵人は、一番手強い相手は手練の大猪と思っっているはずである。当然、一〇〇<sup>キ</sup>以上の猛猪は強いし恐ろしいが、私の実体験からいえば、もっと強くて恐ろしいのが、今日対戦する仔連れの母猪である。

母猪の戦う手口は、犬たちに寢屋を発見されると全犬を自分（母猪）に引きつけあつさりと止められるが、ここからが母猪特有の捨て身の反撃となる。

その攻撃は、寄り付いて来る犬たちを噛みまくるのである。その力はもの凄いなもので、噛みに出て来る犬たちの手足をへし折るくらいである。最悪の場合、噛み合いになると、犬の武器である下顎さえも噛み砕くという恐ろしい力である。

その噛み力で犬たちが腹部を噛まれようものなら、歯は内臓にまで達する。さらに一〇〇<sup>キ</sup>以上のメス猪の特技は犬たちを腹の下に引きずり込んで、巨体に物をいわせ、体重で押し潰すのである。こ

の状態にされたら、どんな犬でも助からない。

それでは五〇<sup>キ</sup>から八〇<sup>キ</sup>くらいまでの猪なら、さしたる攻撃力もないから撃ち獲るのもたやすいと考えがちだが、これくらいの猪は犬たちに追われると猛スピードで突っ走り、並の腕前では撃ち獲れるものではない。

また、八〇<sup>キ</sup>から一〇〇<sup>キ</sup>くらいの猪になると、そのスピードに加えて、俊敏な攻撃力を身につけているので、止め芸によほど優れた猪犬でないと止め切れない。

このクラスの猪はそのほとんどが逃げの一手となるので、逃げ道の先にタツでも置かないことには撃ち獲るのが難しい相手なのである。

以上のことから、単独での猪犬獵では犬たちが猪をがっちり止め置いてくれないことには、いかに名人や達人であっても、仔猪一頭さえ獲れるものではない。

当然、犬芸が一流になっていなければ、猪の発見で一、二度ワンワンと鳴いて進むだけだから逃げられてしまうのだ。（つづく）



アフリカ編

ヒヨウ撃ち(5)

ザ・スナイパー

撃ちたい気持ちをつくつと抑えて、ランドクルーザーでヒヨウの後をつける。この状況で射止めることは簡単だが、狩りの様子を撮影するとなると難題だ。できることなら樹の上に追いつけ、雑巾落としのような狙撃シーンを撮りたい。

ムービー撮影は狙撃以上に大事だ。今の時代なら長時間のビデオ撮影は可能だが、8ミリムービーの頃は、無闇に撮影を始めると肝心の狙撃シーンがフィルム切れになってしまう。当時はゼンマイ巻きの手動から乾電池で駆動するムービーが発売されたばかりで、それだけでもありがたかった。

落葉したサバンナは見通しが良く、地面が平坦で、ヒヨウの隠れる場所は見当たらない。運転はガイド、助手席に私が座り、フィルムをけちりながら、この狡猾な巨大猫の追跡が続く。ヒヨウはわれわれを振り切りたいところだが、逃げてでも逃げてでも車が執拗に追って来る。力が強くて俊足だからといって、動く鉄の箱の追跡から逃げ切れることは難しい。地平の果てまで四方八方が枯れ草で覆われ、隠れる場所は見当たらない。

落葉したトゲの樹をやつと見つけるが、頭を隠せても後半身は隠せないほどの木陰だった。全身をハンターに晒すよりもましと考えたのだろう。

撃ち倒すだけならいとも簡単だが、この猫族だけは決して油断ができない。ガイドから狙撃の命令が出ない。サファリではガイドの命令が絶対である。



茂みに隠れるヒヨウ

そんな緊張がしばらく続く。後で思い起こすと十分間くらいだろうが、時間が何倍にも感じられた。しばらく競走が続く。

逃げ続けるうちに、ヒヨウはようやく身を隠せる枯れ木の茂みを数百メートル先に見つけて、その方向に突進する。全力で疾走して、その隠れ場所に逃げ込む。黄色の体色に黒い斑紋をちりばめた猛獣の体が茂みに沈んでいく。

私はこの動物から目を離さないで追跡して来たので、猛獣の潜んでいる居場所を判別できるが、そうでないと、どこに動物がいるのか、いや、動物がいることさえ分からない。

「君子は豹変す」という諺があるが、元来は良い意味で使われていたようだ。だが、今では「態度や意見などを、がらりと変える」という悪い意味で使われることが多いようだ。

ターゲットのヒヨウはまさに豹変した。この恐ろしい肉食獣は草原に寝そべっていた。

奴の手口はこうだ。寝そべった姿勢から、白黒の入り交じる尻尾を空中に伸ばせてわずかに動かす。

これを見たカモシカは「何だろう？」と好奇心に引かれて近づく。ひと飛びの距離まで獲物が近づくと、いきなり跳躍して襲いかかるのがこの猛獣の手口だ。

このヒヨウはまさにその手口を使おうとしているのだ。  
(つづく)